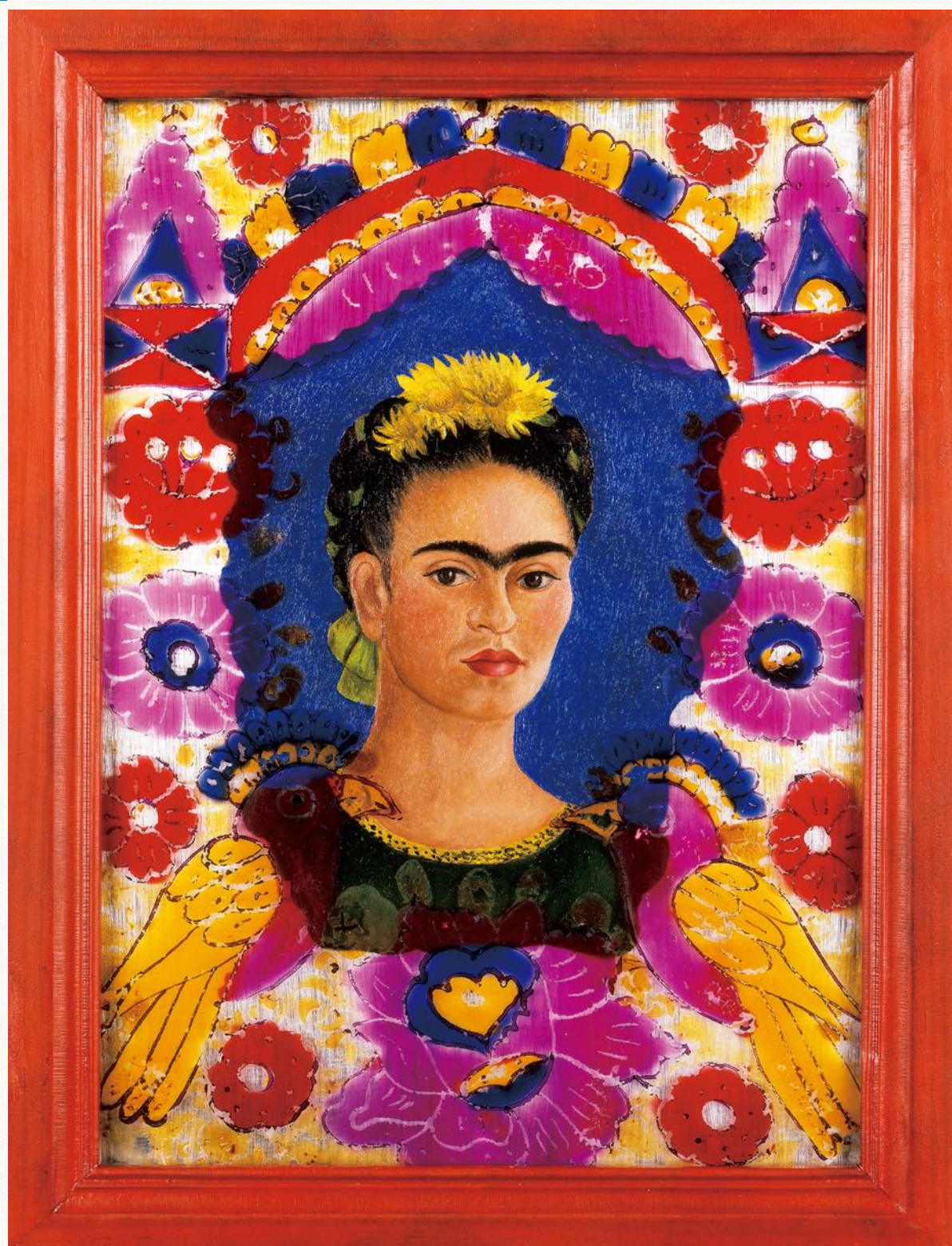




第 3 回

「自画像」

フリーダ・カーロ

アルミニウム、ガラス、油彩 28.5×20.5cm 1938年
ボンビドーセンター蔵（フランス）

©Centre Pompidou, MNAM-CCI, Dist. RMN-Grand Palais /
Jean-Claude Planchet / distributed by AMF-DNPartcom

あなたは、あなたでいい。

メキシコシティ近郊にあるフリーダ・カーロの生家に行ったことがある。鮮やかなコバルトブルーの外壁をもつこの屋敷は「青い家」と呼ばれ、1907年に彼女はここで生まれ、47歳の若さで亡くなった。

晩年に彼女が使っていたというベッドがあった。そのベッドの小ささに驚いた。こんな小さな人だったのか……と。寝たきりになった彼女はベッドの天井に特別製の画架を取りつけ、絵を描いたという。ベッドの前に立ったとき、彼女があるインタビューで「一人の時間が多いから自画像を描くのだ」と語っていたことを思い出した。

フリーダの人生は、世間一般の常識に当てはめてしまえば「不幸な人生」だろう。幼少期から足の病気を患い、さらに少女時代にバスの事故に遭う。生死の境を彷徨い、恋人とは離別。

絶望と孤独が彼女を絵に向かわせる。創作とは悲しいものだ。多くの表現者は精神的な混乱の中から優れた作品を生み出す。彼女もそうだった。絵が認められ画家として成功したフリーダはたくさんの著名人たちと交流をもち、恋愛もするが、他者との交流によって彼女が孤独から救われたことはなかった。

描かれている自画像は、いつも「もう一人のフリーダ・カーロ」である。本当の自分、隠している自分、内面の叫び、欲望、絶望、希望……それを自画像として描いた。彼女の苦しみは人間がもつ普遍的な苦悩であり、だから彼女の自画像は見る者を惹きつけてしまう。

描かれているのは彼女であると同時に、見ている私だから。

初めてこの絵を見た人は「この眉毛がつながっている風変わりな自画像はなんだろうか？」と思うだろう。

実物のフリーダの眉毛はこんなに濃くはない。フリーダは時々うっすらと口ひげを描いたりしてことさらに自分の体毛の濃さを強調する。当時であっても西洋の美の基準は「白い美しい肌」であった。でもフリーダはありのままの自分を堂々とさらけ出して見せた。華やかな民族衣装、つながった眉毛、誇らしげに自分であることを見せつけ誇示する彼女の強さは、新しい時代の女性像として称賛された。

でも、彼女の強さは彼女の弱さの現れであり、いったい強いことと弱いことはどう違うのかわからなくなる。彼女はすべての弱みをさらけ出して受け入れた。身体の障害も自分のコンプレックスも……。それは作品の強さとなり、彼女の人生を支え続けたのだ。この自画像を見ていると、弱みをもたぬ強さなど、存在しないのかもしれない……と思う。

田口ランディ
たぐち・らんてい

作家。1959年東京都生まれ。
人間の心の問題をテーマに、幅広く執筆活動を展開。
『ドリームタイム』（文藝春秋）には、フリーダ美術展で二つの人格をもつ謎の女に会うという短編小説が掲載されている。
また、エッセイ『オラ！メヒコ』（AKIRAとの共著・角川書店）では、メキシコのフリーダ・カーロ美術館を訪れたエピソードを紹介。
『コンセント』『アンテナ』『サンカーラ この世の断片をたぐり寄せて』（以上新潮社）など著書多数。